再発見！　地域の文化力

第４回岡山・京都文化フォーラム

守ろう身近な「一番」

第4回岡山・京都文化フォーラム「再発見！　地域の文化力」（山陽新聞社、京都新聞社主催、JR西日本特別協賛）が昨年12月17日、岡山市北区柳町の山陽新聞社さん太ホールで開かれた。国民文化祭が2010年に岡山、11年に京都で開催された縁もあり、ピアニストで歌人の河野美砂子さん（京都市）、釜師大西家十六代で大西清右衛門美術館館長の大西清右衛門さん（同）、大原美術館理事長の大原謙一郎さん（倉敷市）が、地域に息づく「力」について語り合った。コーディネーターは、江見肇山陽新聞社編集局文化部長が務めた。

■パネリスト■

ピアニスト、歌人　河野　美砂子氏
釜師大西家十六代 大西清右衛門美術館館長　大西清右衛門氏
大原美術館理事長　大原　謙一郎氏
コーディネーター　江見肇　山陽新聞社編集局文化部長

ピアニスト・歌人
河野　美砂子
釜師　大西家十六代
大西清右衛門美術館館長
大西　清右衛門
大原美術館理事長
大原　謙一郎

熱心に議論を展開するパネリスト

河野氏　異分野挑戦 大きな刺激

大原氏　互いの長所認め向上を

大西氏　国文祭で魅力、価値実感

—お三方とも異分野・異文化の交流にご熱心ですね。

河野　私が短歌を始めたのは新聞への投稿がきっかけです。その後、カルチャーセンターで歌人の河野裕子さんと出会い、歌会にも参加するようになりました。歌会では、誰の作品か分からない状態で各自が気に入った歌に投票し、批評し合います。同じ歌でも解釈や感想が異なることがあるので刺激を受けます。言葉を超えて伝わる音楽は素晴らしいけれども、言葉で伝えられる部分はなるべく言葉で伝えたいと、音楽活動をするときも意識するようになりました。

文化庁長官を務められた臨床心理学者の河合隼雄先生は、学生時代には京大オーケストラで不得意だったフルートを、還暦を機に再開されたと聞いています。先生とは、谷川俊太郎さん、私の3人で毎年「お話と朗読と音楽の夕べ」という会も長野県戸隠で開いていました。ひと筋に道を究めるのも大事でしょうが、私自身はジャンルにとらわれず挑戦する方が面白いんです。

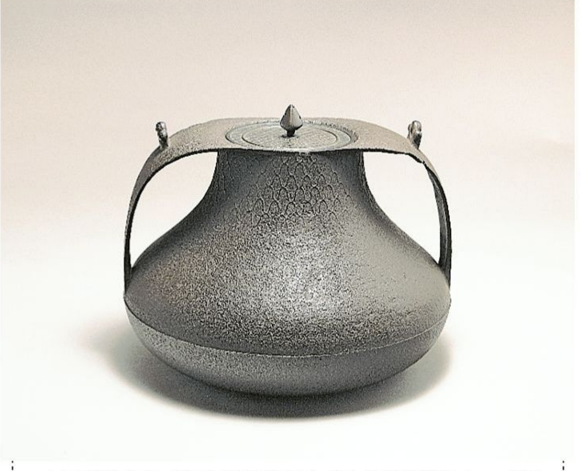
〝茶祖〟とたたえられる臨済宗の開祖・栄西は岡山市出身。毎年、岡山市の後楽園で遺徳をしのぶ「栄西禅師賛仰献茶式・大茶会」が開かれる＝2011年4月17日

大原　大原美術館の基礎となるコレクションを収集した児島虎次郎もバイオリンを愛用していました。虎次郎自身は洋画家で、印象派の巨匠モネと直接交渉して「睡蓮」を譲り受けたりもしていますが、一方でエジプトや中国の古代文化にも強い関心を持っていました。本当にクリエーティブな人は、どのようなものからでも自分のための栄養を吸収するのでしょうね。

河野さんのお話で思い出すのは、詩人でフランス語の翻訳もこなした中原中也が故郷・山口の「防長新聞」に短歌を投稿し続けて才能を見いだされたというエピソードです。文化というのは、多面的な才能に目を光らせている社会に生まれてくるという例ではないでしょうか。当館も文化との出会いの場、異文化の相互理解の場でありたいと考えています。

大西　京都は、ある店でお酒と会話を楽しんでいると、偶然隣座したお客さんに教授されたりする。その人が著名な学者であったりする。褒められれば、心理的に伸びる。有識者は説教はせず、持論を述べてくれる。サロンのように人が集まり交流できる場所の存在は、京都の恵まれた点だと感じています。全く知らない人や物と巡り合うためには、今日のように京都から離れることも必要ですけどね。

私が仕事を始めたころ、工房で釜だけ作ればよいと思っていました。父が病床につき代わりに千家に出仕すると学ぶことが多く、負担に感じました。ところが人と話すことによって、自分が持つ別の面に気づくようになると、異業種で活躍されている人たちとの出合いが楽しみになりました。この人にはこんな釜、というように想像が膨らみ、新たな創作の源ともなります。大西清右衛門美術館は、茶の湯の釜の文化がなくなるのではないかという危機感から開館したのですが、情報を発信することによって、逆に情報がどんどん集まってきました。教わることも多く、研究の助けになっています。



十六代大西清右衛門さん作「夜学釜」。約20年前、相国寺承天閣美術館収蔵の夜学釜の復元を試みたが技術不足で断念。2006年、同館協力のもと１年の期間を経て完成した

—岡山、京都と続いた国民文化祭を通して何か見えてきたことはありますか。

大原　第25回国民文化祭・おかやま2010では、県内の全市町村が参加し、68の事業が開催されました。私が驚いたのは、例えば陶芸の祭典は備前焼のふるさと・備前市で、文芸祭（現代詩）は「現代詩の母」と呼ばれた永瀬清子さんを生んだ赤磐市でというように、いずれの開催地も全国の方に納得していただけるような内容だったことです。どの市町村にも文化の蓄積があることが分かったことは、今回の国民文化祭の最も大きな収穫です。

日本では「おもてなし」ということがよくいわれますが、イタリア観光で人気のあるベネチアやフィレンツェにしても、ホスピタリティーが格段に優れているとは思いません。それでも観光客が絶えないのは、住民が文化の価値を守り抜こうという強い意志を持っているからでしょう。京都と岡山も互いの文化の長所を認め、磨き合うことで文化力を高めたいものです。

大西　第26回国民文化祭・京都2011では、大徳寺や南禅寺をはじめ寺院や植物園で茶道、煎茶の大茶会が茶道の各流儀で執り行われました。京都府内外、遠くは海外からも多くの人が集まってくださいました。その方たちが京都の魅力を発見してくれることによって、市民も地域の持つ文化力を再発見するということがあったと思います。

軽妙な討論に聴き入る入場者

京都には社寺がたくさんありますが、かえって近くにあると足を運ばないものです。最近では私も少し見直してみようと、時間を見つけては行くよう心がけています。国文祭の開催によって、自分の地域にもこんな文化があったのかと実感できたのが一番大きな成果ではないでしょうか。

河野　国文祭の期間に限らず京都には毎年たくさんの観光客が訪れます。どこそこのお菓子がおいしいとか、京都に住む私たちより詳しい方もおられて、そんな店があったのかと教えられることもあります。

ただ、友人とも話したことがあるのですが、京都ではもともと、それぞれの家庭から歩いて行ける範囲で、おばあさん、お母さんの代からの「おいしいおまんやさん（おまんじゅうやさん）」があるのが普通です。岡山もそうかもしれませんが、自分の普段の生活の中で一番おいしいもの、一番美しいものを大事にしてきたということでしょう。今は情報があふれ、いいものがあると聞くと遠くても行かなければいけないような気になりますが、それはかりではしんどいような気がします。岡山と京都は違って当たり前。日々の暮らしに満足するということも時には必要なのではないでしょうか。

—皆さんも今日から身の回りの「これが一番」を探してみませんか。

フォーラムの幕開けは、河野さんの華麗なピアノ演奏が彩った

主催　山陽新聞社、京都新聞社
後援　岡山県、岡山市、京都市観光協会

冒頭発言

河野氏　熱意でよみがえった音色

京都市中心部では明治維新直後、政府の学制発布に先駆け町衆たちが私財を投じ、それぞれの町に小学校を創設しました。これらの小学校が少子化に伴い、近年次々と統廃合が行われるなか歴史ある校舎を利用し公共施設として生まれ変わったのが、中京区の京都国際マンガミュージアムや京都芸術センターです。

数年前、私は京都芸術センターが主催した現代短歌のワークショップで、チェコ製ピアノ「ペトロフ」に出合いました。センターは元明倫小学校の校舎を改装したもので、現在は、音楽、美術、演劇などの活動に使われています。ペトロフは約100年前、学区の有志により小学校に寄贈されたものでした。明倫学区は、古くからの豊かな商業地域です。ピアノが高価だった時代、子どもの教育に対する町衆の並々ならぬ熱意がうかがえます。

ペトロフは修復が必要でしたが、学区の方が中心となり、募金コンサートを15回も開いて費用を集め、昔の音をよみがえらせました。私も機能的な現代のピアノにはないペトロフのみやびな音を生かした演奏会を開きたいと考え企画したのが「モーツァルトに会いたい」と題した演奏会シリーズです。

演奏会は、会場が地域の方に親しみのある元小学校ということで、今まで音楽を聞きに行ったことがないという方も足を運んでくださいました。卒業生でなくても「懐かしい」と言われる方が多く、コミュニケーションも楽しめました。ペトロフの音とモーツァルト音楽の美しさ、それにレトロな空間が人を引き付けたのでしょう。1回だけの予定が好評で、5回の開催の後、最後は400人を超える来聴者を迎え、大ホールのある京都府立府民ホール「アルティ」に会場を移して終了しました。身近な場所が持つ文化力の可能性をあらためて感じました。

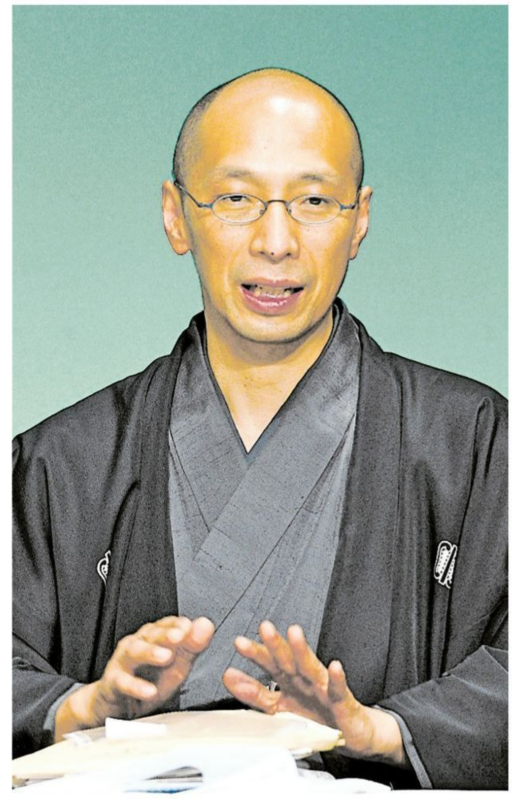
こうの・みさこ　京都市生まれ。京都市立芸術大卒業後、ウィーン国立音楽大などに留学。帰国後、「モーツァルトに会いたい」などさまざまな演奏会を企画。淡路島国際室内楽コンクール優秀賞。歌人としては、第41回角川短歌賞、第5回現代短歌新人賞を受賞。

大西氏　茶釜の伝統、様式　次代に

茶の湯に欠かせない茶釜は、鉄を溶かして鋳型に流し込み成型する鋳造という技法で制作されます。日本で鋳物づくりが始まったのは弥生時代。私が鋳型をつくる技法も基本は当時と変わりません。木型を回転させ、粗さの異なる4層の土で釜の形をつくり、土が軟らかいうちに「霰（あられ）」と呼ばれる粒文様や文字・絵などの彫刻を、へらや薄紙等を使って施します。茶人が愛好する釜は造形や装飾が複雑で、60以上の工程があります。

その名の通り釜座町に住まいする釜師・大西家の歴史は江戸時代初期にさかのぼります。茶道の家元である千家に出入りするようになったのは六代からで、私で十六代を数えます。大西家には約千点の木型をはじめ設計図などの記録も多数保存されています。十代は諸国を回って名物釜の記録を残しました。

茶釜の形や種類が多岐にわたることは、茶道の世界でも意外と知られていません。好みの茶杓を自ら作る人でも、茶釜をつくることはできません。にもかかわらず多種多様な釜が生み出されたのは、施主の要望が釜師の想像力を引き出したからでしょう。歴代が残した茶の湯釜の伝統と様式を広く公開し後世に伝えるため、1998年に大西清右衛門美術館を開館しております。



釜の復元は過去の名品をよく観察するところから始まります。18年考察した後に再挑戦して成功したものもあります。最初は失敗の連続ですが、失敗から糸口が見つかります。技法が分かれば、新たな創作につながります。過去の歴史から新しい技術が生まれることもあるのです。祖先が残してくれた茶釜の歴史文化を次代に伝えるためにも私はできるだけ困難なことに挑戦していきたいと考えています。

おおにし・せいうえもん　1961年京都市生まれ。大阪芸術大美術学部卒。93年に十六代を襲名、98年に工房を設ける京都市中京区釜座町に「大西清右衛門美術館」を開設し、館長に就任。京都市芸術新人賞、京都府文化賞奨励賞を受賞。著書に「茶の湯の釜」。

大原氏　市民レベルの交流を期待

京都が日本にあることが日本の国の価値を高めていることは誰しも認めるところでしょう。「文化首都・京都」という言い方に、京都は文化だけではないという反論も耳にします。先端産業やベンチャー企業も京都の歴史と文化が生み出しているのですから、岡山人の目から見れば、文化がなければ産業も生まれませんよと申し上げたい。

京都の歴史と文化を支えてきたのは、明治初めの小学校に象徴される町衆の力だと思います。明倫小は大西さんのお父さまの母校だと伺いました。祖先が築いた文化を子孫が誇りを持って今も語り継いでいる。権力が移り変わっても1200年の長きにわたり京都が文化の中心であり続けた理由でしょう。

市民の力で文化を創出してきたのは京都ばかりではありません。大原美術館がある倉敷は江戸幕府の天領（直轄地）であったため、お殿様がいませんでした。その分、

市民社会が発達したとも考えられます。大原美術館は日本初の西洋美術中心の私立美術館として昭和5（1930）年に開館しました。文化という公益を市民が担ってきた地域は全国各地に存在します。

桓武天皇が平安遷都を決めたのは、側近だった和気清麻呂の進言によるものだと伝わります。和気清麻呂は岡山県の備前の生まれでした。鎌倉時代、日本に喫茶の風習を伝え、「茶祖」とたたえられる栄西も岡山の人でした。京都の保津川や高瀬川の開削で有名な角倉了以は、岡山県の吉井川を運行する高瀬舟を見本にしたそうです。

京都の皆さんには、文化首都・京都を支える縁の下の力持ちが岡山にもいることを知っていただくと同時に、日本文化を守る同志として、京都と岡山が今後とも市民レベルで積極的に交流していけることを願っています。

おおはら・けんいちろう　1940年神戸市生まれ。東京大経済学部卒、エール大大学院経済学部博士課程修了。クラレ副社長、中国銀行副頭取など歴任し、現在、大原美術館理事長のほか、倉敷中央病院理事長、岡山県文化連盟会長など務める。

(C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。